

はじめに

この夏に突然、近代映画社の小杉文孝氏からご連絡があり、私が過去に北海道新聞に連載させていたでいたエッセイをまとめて、単行本にしたいというお申し出がありました。

たしかにあのエッセイは連載中に、面白とおっしゃって下さる方もいらっしゃいましたが、当然社交辞令と受けとめておりましたし、自分が書いたものが本になるなどは夢にも思いませんでした。

それにあの文章を書きましてからじつに二十余年の月日が流れております。私自身すっかり忘れていたというのが本音です。

それを小杉さんがご覧になったのは、インターネットの上ででした。現在店を継いでいる息子が、ホームページを立ち上げた際に毎晩コツコツと、インターネットへと書き写していたのです。ですからこの拙文は、紙とインクの世界からインターネットの網の目へと写しかえられ、今回ふたたび紙とインクの世界へ戻ってきたというわけです。新旧文化、文明の交流は目を見張るものがあります。

さて、北海道新聞に掲載されたときのタイトルは「西洋料理と私」。私は昭和三年に学校を出ると同時に家業を継ぐ形で洋食屋の道に入り、戦前、戦中、戦後の洋食屋の現場に立ち会いながら、日本の西洋料理の変遷を垣間見てまいりました。それらを思い出すがままに書き連ねたものです。

そのなかでも、小杉さんがとくに興味をもたれたのが私の父の話でした。父は横浜で修行を積み、北海道に渡り、そこで大正天皇（当時皇太子）のお料理人を経てから苫小牧に初めての洋食店を開いたという明治のコックさんです。私の目から見ても、そこには文明開化の香りがプンプンとして、いま風にいえばレトロモダンということになります。

今回、単行本にまとめていただくにあたりましては、北海道新聞のエッセイに加えて、苫小牧民報で連載していただいた「ゆのみ」の文を追加。さらに加筆改訂という形をとっております。

こんなお話がみなさまの舌にかなうのかどうか。最後まで食していただければ幸いです。

平成十八年十二月吉日

山下正